
事件簿その1 名探偵は安楽椅子で推理する

keita_aikawa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

事件簿その1 名探偵は安楽椅子で推理する

【Nコード】

N1327S

【作者名】

keita | aikawa

【あらすじ】

以前、他サイトで掲載していた作品を加筆修正したものです。ミステリ小説の最大の山場は解決編なので、そこだけを切り出して短編小説を書いたら面白いだろうというのがコンセプトだったのですが……

名探偵御影石明の事件簿

事件簿その1 名探偵は安楽椅子で推理する

「それで、君はこの依頼を引き受けるつもりなのかい？ 謎めいた依頼人、突如失踪した女性の捜索、なんとも君好みの事件じゃないか」

三日後に再度訪れる約束をして依頼人が去ると、私は御影石に聞いた。ここは御影石探偵事務所。最近えらく儲かっているようで、イギリスのアンティークで統一されたオフィスはまるでシャーロックホームズの世界だ。

「何を言っているんだい。やれやれ、そんなことだから君の小説は売れないんだよ」

御影石が彫りの深くて偏屈そうな、いかにも名探偵という風な顔をゆがめて溜息をついたのでいつものことながら腹が立った。私の小説が売れていないのは事実だが、それとこの事件がどう関係しているというのだ。

「君こそ何を言っているんだ——」

そこまで口にして、私は言葉を飲み込んだ。

「まさか、君はもう——」

「そう、この事件はもうとづくに解決しているのだよ。壇ノ浦君」
お気に入りのロッキングチェアを揺らしながら、御影石はお決まりのせりふを言ってニヤリと笑った。

「そんな、まだ彼からは何も具体的な話は聞いていないじゃないか」
仕事場から失踪した同僚の女性を探して欲しい。依頼人が事件の

内容について話したことはほとんどそれだけだった。あとは具体的に料金と期間はどの程度かかるのか、とか、秘密は厳守してもらえるのか、とか、そういった質問をして、三日後にもう一度訪れると告げて去ったのだ。依頼人や失踪した女性の素性についてすら一切話されなかったというのに、本当に御影石はこの事件を解決してしまったのだろうか？

「やれやれ、君は本当にミステリ作家なのかい？ 大切なのは話を聞くことよりも、相手を良く観察することなのさ。まずはさっきの依頼人、御堂筋氏の職業はなんだったと思う？」

彼はパイプにマツチで火をつけると一度深く吸ってから、いつもの嫌味な口調で言った。腹がたつたので絶対に当ててやろうと私は考え込んだ。

「うーん。君が依頼人に身分を尋ねたとき、彼は職業を明かしたがいなかったよね。それで君もあつさり追求をやめた。もしかしてあの時、君にはすでに分かっていたのかい？」

「そうだね。私は最初に彼を見た時からピンときていたよ。そして彼の姿を観察して確信したのさ」

彼のせりふを聞いて私は依頼人の御堂筋氏の姿を思い起こした。上下ともジャージのいかつい男、マスクやサングラスこと付けていなかったものの室内でもニットキャップをまぶかに被り、顔を見せたくないふうだった。言葉遣いも良くはなく、最初は暴力団関係者か何かかと思つたのだが――

「まさか、ヤクザか何かかい？ それで君は警察から話を聞いた事があつたとか？」

結局、私は第一印象をそのまま口に出した。彼は名探偵という職業上、警察関係者とも深いかわりを持っている。私のような一般人には知るよしも無い情報を握っていることもよくある。

「ふふん、君がそんなだから小説に出てくる探偵まで三文探偵なんだよ。古典に学びたまえ。まず、君が見るべきだったのは御堂筋氏の手だったのさ」

御影石はパイプを咥えたまま器用に鼻で笑った。手？ そんなものは全く意識していなかった。

「まさか、御堂筋氏は小指でもなかったのかい？」

「だからそうじゃないって。彼は異常なほど深爪だったんだ。彼の爪は普通の人の半分ほどの爪の長さしかなくて、普通の人なら爪で覆われている指先の部分がほとんど露出するほどにね」

そう言っただけで彼は自分の手の甲を差し出すようにして私に見せた。

「深爪だって？ それだけで彼の職業が分かるのかい？」

「もちろん、それだけじゃ確証にはならない。だが、私には既に幾つかの前情報があったからね。それで、彼の深爪が決め手になったのさ。これだけ言ってもまだ分からないのかい？ そういった職業の人種を僕たちはほとんど毎日目にしてるじゃないか」

私たちが毎日目にしている爪の短い手？ しばらく考えてみたが全く分らない。

「ちよつと思いつかないなあ」

「彼はＡＶ男優だよ」

御影石はさらりと言った。

「えっ!？」

彼のとんでもない発現に私はおもわず大声をあげてしまった。そもそも私はＡＶを毎日見たりはしない。色々突っ込もうとも思ったが、私にそんな隙すら与えず、彼は得意げに続ける。

「ＡＶ男優は手マンをしなくちゃいけないからね。爪がとても短いんだ。彼が入ってきた時からＡＶ男優のバツフロー御堂筋に似ているとは思ったのだが、まさか本人だったとはね。本当ならＤＶＤにサインを貰いたかったのだが、依頼人のプライバシーをいたずらに明かすわけにもいかないだろう？」

彼は紫煙を吐き出してから悩ましげな口調で呟いた。名探偵が手マンとか言っな。

それから御影石が語った所によると、バッファロー御堂筋といえば業界ではかなり有名なＡＶ男優の一人で、最近では監督を兼任したりもしているらしい。もともとはプロレスラーを目指していた巨体から繰り出される駅弁ファックの迫力はもはや芸術の域だとか、でもボキヤブラリーがないから言葉攻めが今ひとつだとか、そういう話を１０分ほど聞かされたが、このあたりは今回の事件とは関係ないだろう。

「だけど、彼がＡＶ男優だとうして事件が解決してしまうんだ？」
彼が蘊蓄語りをいつまでも止めないのも、私は話を本筋に戻した。
「やれやれ、その頭に詰まっているのはマッシュポテトなのかい？」

ＡＶ男優の職場にいる女性といったら？」

「あつ、そうか。失踪したのはＡＶ女優ということになるね」

「そう。そして最近失踪したＡＶ女優といえば彼女しかない」

御影石は立ち上がると書棚から『ＡＶ関係 第２３巻』と背表紙に書かれたファイルを抜き出して開き、私に寄越した。別にオーディオに凝っている様子もないのにＡＶに関するファイルがやたら多いとは思っていたのだが、そっちの方だったか…… まあ、それはともかく、ファイルに綴じられたのはスポーツ新聞の切抜きだった。日付は二日前のもの、見出しには大きく『おもしろロリータ姫、撮影中に謎の失踪！』と書かれていた。

内容は見出しのまま、おもしろロリータ姫の二つ名で有名なＡＶ女優、川中島ちゅーりっぷ（２０）が１２作目となる『おもしろ幼稚園？』の撮影中、私服もそのままに突如姿を消し、行方は依然不明のままという記事だった。記事によるとちゅーりっぷ姫（原文ママ）は『おもしろ学園』で衝撃デビュー、代表的な出演作は『失禁保育園』『おにいちちゃん、怖くておトイレにいけないよう』『おにいちちゃん、おふろなのにおしっこしたくなつてきちゃった』等等……
「彼女も良い女優だったのだがね。残念だよ」
そう言つて御影石は悲しげに目を伏せた。

またしばらく彼のちゅーりっぷ姫に関する蘊蓄が挟まるのだが割愛しよう。

「さて、これで事件の被害者は分かったわけだ。君の小説の探偵だったらここからどのような推理を展開する？」

「ちよつと待てよ、新聞には失踪としか書かれていないじゃないか。依頼人も失踪としか告げていないだろう？　なんでこれが推理が必要になるような事件で、彼女が被害者だとわかるんだ？」

私の小説の探偵はおもしろいロリータ姫の失踪についてなんか推理なんかしない。もっとこう、ハードな本格ミステリなのだ。という言葉をぐつと飲み込み、私はワトソン役に徹した。

少なくとも新聞記事の書きようではAV女優が撮影の内容に腹を立てるかなにかして突然姿を消したかのように書いてあったのだ。私がそう反論すると御影石は心底失望したように深くため息をついた。

「少し考えれば分かるだろう？　おもしろ幼稚園シリーズの撮影中だったとしたら彼女は園児服か、裸だったはずなんだよ。あのシリーズでは女優の衣装はそれだけだからね。しかも、おもしろ幼稚園シリーズの撮影は都内の幼稚園を借り切つての撮影というこだわりよう。さすがに園児服姿の女性が街を歩いていたら今まで足取りが掴めていないという事はないだろう？　要するに、そもそも彼女には誰の目にもつかずに失踪することなどできなかったのさ。何らかの事件の臭いは感じていたのだが、まさかこんな——」

そう言つて親指を噛んだ。なるほど、そう言われれば不自然ではある。まあ、おもしろ幼稚園シリーズについての基礎知識の無い私には不可能な推理ではあるが。

「確かに、これでこの件の事件性は見えてきたね。だが、まだ私には全貌が見えないよ。たつたこれだけの情報で一体どうしたらこの事件を解決できるというんだい？」

「解決の鍵は、なぜバツファロー御堂筋氏が私を訪ねてきたかとい

う事なんだよ、壇ノ浦君」

「失踪したＡＶ女優の搜索をＡＶ男優が依頼しに來ただけだろう？
そう不自然な話には聞こえないんだが――」

「やれやれ、まだわからないのかい？　だったら結論から言っ
てしまおうが、彼こそがこの女優失踪事件の犯人なんだよ。そして彼女は
もう生きてはいない」

「えっ、それは本当かい？」

彼のせりふに私は愕然とした。この事件が殺人事件だったとい
うのか？

「そうだよ」

御影石は平然と答えた。

「正確には彼と撮影スタッフ全員だね。おそらくちゅーりっぷ姫は
撮影中に死んでしまったのさ。腹上死というやつだろうね」

「だが、そういうことなら事故だろ、そう重い罪にはならないんじ
やないか？　警察に届け出もせず、死体をどうしようって方が
よほど重罪だぞ」

無論何らかの罪に問われる可能性はあるが、それでも怪しげな探
偵に頼るより、正直に警察に連絡したほうが良いはずだ。と私は思
った。彼は私の意見を鼻で笑ってから答えた。

「おもしろし幼稚園シリーズではＡＶ女優の事務所と製作会社とは別
だからね。撮影中の事故で死んでしまえば製作会社の責任になるが、
女優が機嫌を損ねて失踪したとなれば事務所の責任になるという訳
さ。生き馬の目を抜くインディーズＡＶ業界はどの製作会社もカツ
カツの状態だ。損害賠償など請求されたらあつという間に潰れてし
まうよ」

「なるほど」

私は彼の豊富なＡＶに関する知識と推理力に感心した。

「恐らく、彼らは私に捜査させて自殺に偽装した死体でも発見させ
るつもりだったのだろう。だが、すぐに発見されると死亡推定時刻
が詳しく分かってしまい、事務所が把握しているスケジュールから

撮影中に彼女が死んだ事がばれてしまう。安全に偽装するためには少なくとももう数日は遺体を隠しておきたいってところだろう。だから私は何も知らないフリをして彼をもう一度泳がせた。御堂筋氏は間違いなく私のところへもう一度姿を現すよ」

そう言っただけで御影石はパイプの燃え滓を灰皿にこん、と落とし、それから付け加えた。

「だが、並の探偵ならともかくこの名探偵御影石明を死体発見役にキャスティングしたのは大失敗だったね」

違う、彼らの犯した間違いはＡＶが大好きな名探偵がいるという可能性を考えなかったことだ。私はそう思った。

「それで、君はどうするんだい？」

「私も一般市民の義務として警察に電話しなくてはいけないね。ファンとしては、バッファロー御堂筋のマシンガン駆弁ファックが見られなくなるのはとても残念だが」

そう言っただけで彼はアンティーク調の装飾のなされた電話のダイヤルを回し始めた。

まさにアームチェアディテクトタイプ。名探偵御影石の見事な名推理に感服すると共に、私は彼が高校のころ『むつつりスケベ』と陰で呼ばれていたことを思い出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1327s/>

事件簿その1 名探偵は安楽椅子で推理する

2011年4月2日00時25分発行